

鳥取県 米子大会 参加報告

日 時：平成22年11月13日（土）10：00～16：00

場 所：米子コンベンションセンター ビッグシップ（鳥取県米子市）

大会主題：「今を生きる子どもたちへ」～未来へ夢を紡ぎ心を育てるPTA～

開会式

- ◇ 開会宣言 主催者あいさつ
- ◇ 国歌斉唱 司会者は地元のアナウンサー
- ◇ 主催者あいさつ
- ◇ 来賓あいさつ
- ◇ 来賓祝辞
- ◇ 歓迎のことば 感謝状贈呈：山口県から野上さん（右）
- ◇ 来賓紹介
- ◇ 祝電披露
- ◇ 感謝状贈呈
- ◇ PTAの歌斉唱
- ◇ 閉式のことば

◇ 主催者あいさつ

((社)日本PTA中国ブロック研究大会 石田 昭博 大会会長)

本大会で、子育ての「ヒント・きっかけ」を持ち帰っていただきたい。

大切な子ども達に「生きる力」を身につけさせ、安心して学べる教育環境をつくり守らなければならない。

学校・保護者の更なる協力はもとより、地域社会と一体となった活動が必要。

小さな研修会・交流会等での出会いを大切に、人と人との絆を深め、思いやりの気持ちを忘れないように。

((社)日本PTA全国協議会 相川 敬 会長)

本大会で、大いに討議、交流を深めながら、子ども達が楽しく夢を語る姿を想像し、PTAとしてその実現にチャレンジできる環境を築く一助となることを願います。

実践発表 ～伝えたい想いをメッセージに代えて～

劇団ピュア

米子小中学校PTA連合会傘下のPTA会員やPTA会員OBOGが、5年前の全国大会分科会で劇「我が家は大丈夫？」を発表して以来、「劇」をはじめとするいろいろな活動を通じてその連携を深めるとともに、米子市中学校PTA連合会・米子小学校PTA連合会・米子市内各小中学校PTAの行事についても協力や、地域づくりを中心とした地域貢献活動を幅広く行っている。

劇『夕焼けポレポレ』 ※「ポレポレ」はアフリカのスワヒリ語で「ゆっくり ゆっくり」という意味。

30年前に中学3年生だった同級生が火事で亡くなり、葬儀のために集まった男女9名、その名も「チーム友ッチ」。亡くなったのは、当時いじめられっ子だった「友ッチ」。葬式の帰りに集まった母校の教室で、昔を懐かしみ、また現在の状況を話し合っている。なぜ「友ッチ」はいじめられていたのか？なぜ1年生の夏から変わってしまったのか？

思い出を語り合ううちに、「友ッチ」が1年生の夏から耳が聞こえなくなったのではないか、という事実にとどりつく。耳が聞こえないことがバレると、聾学校へ行かなければならないと必死に隠し、聞こえない耳で必死に声を聴こうとしていた「友ッチ」が浮かび上がる。さらに、「友ッチ」が、いじめられていた自分をかばった代わりにいじめが始まったことを告白する同級生。なぜ気づいてあげられなかったのか？一人気づいていたにも関わらず、言い出せなかったのか？なぜ当時、いじめの原因を告白できなかったのか？自分を責める同級生に、現在のそれぞれの苦悩を各自が告白することで、乗り越えるすべをつかもうとする。

結果、悩んでいる自分は「一人じゃない」ことに気づき、みんながどこかで「つながっている」ことを確信する。そばにいる人と手をつなぐことができれば、よりよい社会ができる、ということを訴えている。

- ▼ みんな「つながっている」ことを確認しようと、手をつないでみようという提案する。自分に関わっている人とも手をつなぎたいと、その間に入れてみる（間隔の空いている所）。「手をつなぐ」は、現代社会のコミュニケーション不足を解消する手段では…

記念講演『生きる』

アルピニスト 野口 健 氏

37歳。高校時代に先輩を殴り停学処分を受けた時に、（学校に内緒で）旅に出た際、何気なく手にとった故植村直己氏の著書『青春を山に賭けて』に感銘し、登山を始めた。1999年にエベレストの登頂に（3度目で）成功し、7大陸最高峰を世界最年少（25歳）登頂記録を樹立。2000年からはエベレストや富士山での清掃活動を開始。

現在は、環境問題にとどまらず、第二次世界大戦時の日本兵の遺骨収集活動にも積極的に取り組んでいる。



演題『生きる』

最近では登山家（アルピニスト）というより「ゴミの人」と言われることが多くなった。「冒険家 野口健」という表現もあるが、冒険家はたくさんおり、名前が一つの肩書きになるようにした方がいいと「アルピニスト 野口健」という表現をとっている。

初めてエベレスト登頂を目指した時、インタビューで「自信がなければやらない」と大風呂敷を広げたが失敗。帰国後マスコミからつつかれた。2回目の挑戦の時には、彼女から香水をもらった。「無理しないでね」と言われたが、無理しないと登れないのがエベレスト。あと少しのところ（ベースキャンプ）で、無理をして登るかどうかの選択を迫られた。彼女の香水をかいたことで、彼女から「無理しないで」と言われたことを思い出し、断念した。

その時に無理をして登頂を目指したメンバーは遭難死した。「しては行けない無理」もあるのだと痛感した。それから登山には香水を持って行くようにしている。帰国後は、やはり冷たい扱いだった。

あきらめることは成功ではないが、失敗でもない。頑張ったが人が褒めてくれないなら、（もう一人の自分が）「よく頑張った」と褒めてやった。記者会見ではそんな場面でニヤッとしたため、ひんしゆくをかった。何をもって「成功」で何をもって「失敗」かはわからない。相手の基準に合わせる必要はない！では自分の中の基準はというと「51%成功したら成功したとっていい」「49%失敗してもいい」と思えたら楽になった。

エベレストでは「死」を感じる。いくつもの遺体を横目に登っていく。「死を感じる」からこそ、「生」に対する執着心を強く感じる。死に対する「拒絶反応」が働く。「死」はロマンでも何でもない。「現実」である。「生きて帰ろう」という気持ちが強くなった。不安になった時、メンバーの手を握り、強く信号を送る。サイ

ンを共有することで、強い意志がわく。その後エベレストに登頂成功した際に、初挑戦初登頂を果たした英国人がいた。歓喜の登頂の後に待っていたのは、下山の恐怖だった。登る時には必死になっているが、絶壁を降りることほど怖いものはない。その英国人は恐怖におののき暴れた。何度もビンタをして正気に戻そうとしたが、叫びながら滑落していった。全員あぜんとしていたが、「生きて帰ろう」と強い意志で下山した。

冒険には絶えず「死のピンチ」が訪れる（特に下山の時）。同行者を見捨てる（失う）こともある。「もう自分はダメだから先に行ってくれ」と言われることもある。見捨てなければならぬ辛さの中で「俺は死なない」と自分で言い聞かせた。「生に対する執着心」を持ち続けた。

ゴミ収集（環境問題）も同じ。環境問題という「言葉」だけが飛び交うが、そこには現実の「死」は見えてこない。「現実の死」を意識するからこそ活動が続けられる。冒険と同じで、**あきらめたところで終わってしまう！**不法投棄を見なければ良かったと思うこともある。しかし、見て（知って）しまうと背負ってしまう。だから続けている。富士の樹海で活動をした時、（その筋の人から）嫌がらせを受けた。飼っていたペットを殺されたこともあった。実際に何度も引越をしている。それでも負けたくはなかった。ここでも「生に対する執着」があったのだと思う。

よく父親から「物事には必ずA面とB面がある。常に見えているA面よりも、見えないB面を見ろ！」と言われた。その言葉が今も残っている。見えないところに捨てる「不法投棄」はB面。そこから目を背けることはできない。

この活動をやっていくうちに、いろいろなことが分かってくる。**環境問題は人間社会が相手**。どういう社会を作っていくのか？その答えを見つけるための活動でもある。そこにはどうしたいのかの「夢」がある。だから続けることができる。

第二次世界大戦時の日本兵の遺骨収集活動は、祖父が軍人で、上官だったことが影響している。自分より先に部下が次々に死んでいった。自分は生きて帰国し、それから「自分だけが生き延びて良いのだろうか？」という話をよく聞かされた。そんな祖父の気持ちを大切にしたいと活動を始めた。始めたとき「終わったことだから掘り起こして欲しくない」と遺族会関係者から言われた。「終わったこと・・・」でいいのか？現地で亡くなられた人は「天皇陛下万歳！」と言って死んでいったのだろうか？それは違う！愛する家族、親、子供など、伝えたいことがたくさんあったのに。それを伝えられず、想いをはせて亡くなっていったに違いない。**命を捨てるのは大変なこと**。国のために（死ななくてもいい）命を捨てた人を大切にすることは、絶対必要である。名前は分からなくても、一人でも多くの「日本人」を母国に連れて帰りたい。

だからこそ今、「生きる」ということを真剣に考える。私たちが、そして子ども達が「生きる」ことのできる社会づくりを目指して。

閉会行事（省略）

〈山口県内PTA会員さんの報告〉